

## 保育内容（表現）における模擬保育実践 —総合的な評価の視点から—

貞方 聖 恵

九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2023年11月1日受付, 2024年1月9日受理)

### 要 旨

本研究は、保育内容（表現）における模擬保育の評価を通して、保育の総合的な視点から学生の得意な部分と今後指導が必要である部分を明らかにすることを目的とするものである。評価項目として、子どもに向ける表情や話し方などの項目、指導計画（日案）の内容に関する項目、具体的な援助や言葉かけに関する項目など9カテゴリー・36項目の、模擬保育に参加した学生による評価を分析した。その結果、保育者の笑顔や話し方、楽しく取り組むことができる活動設定の評価が高い一方で、子どもの目線の高さで話すこと、子どもの主体的な活動を引き出すこと、援助やほめることに対する評価が低く、学生が得意とする部分と今後さらなる指導が必要である部分が明らかとなった。この結果を踏まえて、特に乳幼児期の保育・教育の基本的考え方である「子どもの主体的な活動を促す」に関する内容について学びを深めること、指導計画を作成する際、子どもたちの姿をイメージすると同時に保育者としての関わり方について指導する必要性を指摘した。

キーワード：保育内容（表現）、模擬保育、振り返りの視点、子どもの主体性

### 研究の背景と目的

文部科学省策定の教職課程コアカリキュラム（文部科学省，2021）には、教職課程で共通して身につけるべき内容や目標が明示されている。幼稚園教諭養成課程では、保育内容の指導法に関する科目の到達目標の中に、「指導案の構成を理解し、具体的な保育を想定した指導案を作成することができる」「模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている」<sup>1)</sup>と示されている。つまり、指導案作成及び模擬保育とその振り返りを行うことによって、保育の構成員や実践力を身に付けることが求められている。保育者養成校では、保育内容の指導法に関する授業において、具体的な保育場面を想定して活動を立案し、学生間での模擬保育を行った上で振り返りをするというPDCAサイクルの視点を活用した授業展開が多く行われている。筆者自身も、本学子ども健康学科2年生対象の「保育内容（表現）」及び「保育内容（人間関係）」の授業において、模擬保育指導を行っている。

模擬保育の学びに焦点を当てた先行研究としては、模擬保育後の学生の振り返りをもとに学びを明らかにしているもの（坂本，2015、坂本・田中，2015、栗山，2019、上月，2019）、保育の観察者としての学びを明らかにしているもの（池田，2013、畑・池上・他，2017）、保育者役・子ども役の2視点から学びを明らかにしているもの（猪田・久保木・塩津，2018）、保育者・子ども役・観察者の3視点からの学びを明らかにしているもの（杉村・安東，2018、猪田・久保木・塩津，2019）がある。それぞれの研究において、模擬保育を通じた学生の気づきや学び、今後の課題について示されている。例えば、坂本（2015）<sup>2)</sup>は、模擬保育の映像を通じた自己省察から、緊張せずに自信をもって設定保育をすることの大切さを学生が認識したこと、学生自身が自分の良さを再認識できたことが最も効果があったと述べている。また、猪田他（2018）<sup>3)</sup>は、模擬保育導入は学生の主体的な学びの姿勢と意欲の向上及び具体的な保育イメージの獲得などには非常に有意性があるものの、実践の場で活かすために必要とされる柔軟な応用力や多様な対応性等、学生育成のための課題は多く残されたと述べている。

これらの研究の多くは、模擬保育を行った上で感じたことや学びについて、学生自身の振り返りレポートをもとに分析、考察されている。教職課程コアカリキュラムに示されているように、保育を改善する視点を身につけるためには、立案や活動内容に関する視点だけではなく、保育者としての表現力や具体的な子ども

との関わり方なども含めた総合的な視点において振り返る必要があると考える。しかし、学生の気づきをもとにした分析のみでは主観的な評価にとどまり、保育を総合的、客観的に振り返ることができているとは言い難い。

そこで、本研究では、表情や話し方などの保育者としての表現に関する項目、立案や活動内容に関する項目、具体的な援助や言葉かけに関する項目など9カテゴリー・36項目の評価の結果をもとに保育の総合的な視点から、学生の得意な部分と今後指導が必要である部分を明らかにすることを目的とする。このことにより、改善が必要な項目に対して重点的かつ具体的に指導を行うことが可能となり、授業内の模擬保育や実習の設定保育に向けて学生の保育実践力を高めることができると考える。

## 方法

### 1. 調査対象者

子ども健康学科2年生 幼稚園教諭養成課程及び保育士資格希望者。  
保育内容（表現）を受講する100名。

### 2. 調査時期

2023年7月20日～8月4日、保育内容（表現）の授業内に実施した。

### 3. 調査内容

模擬保育終了後、子ども役として参加した学生による評価を実施した。

評価内容は、「顔の表情」「話し方」「指導計画」「導入」「主体的な活動を引き出す」「活動内容」「保育者の援助」「子どもがしたことを認める」「活動する子どもの姿」の9カテゴリー、35項目である（資料1）。回答は、上記の項目について「とても良い」を5、「良い」を4、「普通」を3、「あまりよくない」を2、「よくない」を1とする5段階評価とした。

## 模擬保育の展開

### 1. 調査対象となる授業の概要

「保育内容（表現）」は、幼稚園教諭免許及び保育士資格必修科目であり、2年生を対象とした演習科目である。前期に2クラスに分けて開講している。受講人数は1クラス約50名で、いずれも担当教員は筆者を含めた2名である。以下に、授業概要と到達目標を示す。

#### 【授業概要】

- ・保育所保育指針、幼稚園教育要領に記される、領域「表現」について、演習を通して理解を深める。
- ・身体表現、造形表現、音楽表現について、保育現場での実践を想定して演習に取り組み、幼児の表現を引き出すための実践力を身に付ける。

#### 【到達目標】

- ・領域「表現」について説明することができる。
- ・発達に応じた表現活動を実践することができる。
- ・自身がイメージした保育実践を指導案にまとめることができる。

到達目標を達成するために、授業では、領域「表現」のねらいと内容の理解、幼児の発達の理解、子どもの思いの汲み取り、子どもの主体的な活動を促す保育、環境構成、保育者の援助・かかわり方、指導計画の作成を中心とした内容を行っている。

### 2. 模擬保育の実施方法

本授業全15回の内、模擬保育に関連する第11回から第15回の授業の流れと内容の概要は、表1の通りである。

授業の大まかな流れとしては、保育の立案から模擬保育実施、評価及び振り返りを行うことによって、実

践力を身に付け、次の模擬保育や実習における設定保育などへと繋げていく。

まず、第11・12回の授業において、模擬保育を行う2人組を決定し、模擬保育の活動検討と指導案作成を行った。

表1. 授業の流れと内容の概要

回数	内 容
第11回	・ 模擬保育を行う2人組（場合によっては3人組）を決定する。 ・ 2人組で模擬保育のねらい及び活動内容を検討する。
第12回	・ 2人組で指導案を作成する。 ・ 模擬保育の準備、練習を行う。
第13回	・ 模擬保育を実施する。(1組15分間) ・ 保育者役、子ども役、記録係に分かれる。 ・ 模擬保育終了後、子ども役の学生は資料1の項目について評価を行う。
第14回	・ 模擬保育を実施する。(詳細は同上)
第15回	・ 模擬保育を実施する。(詳細は同上) ・ 模擬保育担当の保育者役としての自己評価を行う。

模擬保育の保育者役の構成については、基本的に2人組とした。受講人数の都合等により3人組とすることもある。結果として2クラス合計48組となった。少人数の構成にした理由として、すべての学生に保育者役を経験してほしいこと、立案から模擬保育実施、振り返りまでの過程を経験することによって他者と協同しながら保育を行う力を身につけてほしいという思いからである。3人以上の構成になると自分の考えや意見を言えなかったり、他の学生に任せきりにしてしまう学生が出てきたりするなどの状況を踏まえたものである。

指導案の作成方法については、本授業のみならず、教育課程・保育計画総論や実習事前指導などの授業において繰り返し学習している。

次に、第13回～第15回授業での模擬保育実施についてである。模擬保育は3週に渡り、2教室に分かれて実施した。教員はそれぞれの教室を一人ずつ担当することとした。模擬保育は1組15分間である。模擬保育を行う保育者役2～3名、子ども役15名前後、記録（動画撮影）係1名を1グループとした。模擬保育が終了するごとに、子ども役の学生は評価を行うこととした。1授業内で1グループ最大4組の模擬保育を実施した。全ての模擬保育発表終了後、自己評価としてレポート作成、提出を行った。

### 3. 模擬保育の内容

模擬保育の活動内容及び対象年齢は自由とした。活動内容は領域表現のねらいが達成される活動に限定せず、各自が取り組みたい活動を模擬保育で行うこととした。そのため、活動内容は2人組によって、さまざまであった。例えば、次の実習で行う予定である保育活動の練習として取り組む学生、行ってみたい活動内容を提示し合った上で決定する学生、これまでの授業や実習で経験したことのある活動を計画する学生など、それぞれが取り組みやすい方法での立案となった。

表2は、模擬保育の活動内容について種類別に数を示したものである。制作活動と運動遊びが多く設定されたことがわかる。例えば、制作活動では、「アルミカップで花火」「スイカのうちわ作り」「紙コップフラワー」「紙皿コマ作り」「ストロー飛行機」など、季節に応じた制作物や作って遊ぶ活動が行われた。また、運動遊びでは、「新聞紙玉入れ」「けんけん相撲」「ボール運びリレー」「フルーツバスケット」「新聞紙しっぽ取り」など体を動かす楽しさを味わうとともに、ルールや集団での活動を楽しむことができる内容を中心に行われた。

表2. 保育内容（表現）模擬保育 活動内容

活動内容	対象年齢				計
	3歳児	4歳児	5歳児	その他	
制作	5	11	3	2	21
運動遊び	3	7	9	3	22
言葉遊び	0	0	2	0	2
リズム遊び	1	1	1	0	3

## 結果と考察

表3は、模擬保育における保育者役学生の評価結果について、項目別に平均値と中央値、標準偏差、順位を示したものである。以下の考察において、項目別順位は、5位以内は高い、10位以内は比較的高い、25位から31位は比較的低い、32位以下は低いとする。また、標準偏差については、0.85以下を小さい、0.92以上を大きいとして分析を行うこととする。また表4は、カテゴリー別の平均値と標準偏差、順位を示したものである。カテゴリー別に評価結果の分析及び考察を行う。

まず、カテゴリー「顔の表情」の評価結果をみると、「【1-1】笑顔が多い」は平均4.30、「【1-2】表情が豊か」は平均4.21であり、全35項目中6番目と7番目と比較的高い評価が示された。カテゴリー平均も4.26と、全9カテゴリーの中で1番目に高い。この中で、「【1-1】笑顔が多い」は標準偏差が0.80と小さいことから、学生にとって評価しやすい項目であることがわかる。対象学生は、他授業内での模擬保育、幼稚園教育実習（幼稚園教諭養成課程のみ）及び保育所実習を経験している。模擬保育実施時は緊張している学生が多く見られたものの、保育者として表情の豊かさが必要であると感じ、表情を意識した模擬保育を行った結果であることが推察される。本授業は保育内容（表現）であり、講義の中で、子どもたちの豊かな表現を引き出すためには保育者自身の表現にも意識して取り組む必要があることを伝えている。カテゴリー「顔の表情」については、おおむね実践することができているようである。

表3. 項目別の平均値、中央値と標準偏差

カテゴリー	評価項目	平均値	中央値	標準偏差	順位
顔の表情	【1-1】笑顔が多い	4.30	4	0.80	6
	【1-2】表情が豊か（うれしい・楽しい・驚き・悲しい・心配）	4.21	4	0.85	7
話し方	【2-1】ゆっくりと丁寧に話している	4.39	5	0.72	1
	【2-2】語りかけるように話している	4.32	4	0.78	5
	【2-3】一人一人を見ながら話している	4.07	4	0.87	18
	【2-4】子どもの目の高さで話している	3.68	4	0.94	35
	【2-5】わかりやすい言葉で話している	4.13	4	0.89	13
指導計画	【3-1】ねらいと内容がその年齢に合っている	4.08	4	0.85	15
	【3-2】ねらいと内容が具体的でわかりやすい	4.04	4	0.84	22
	【3-3】ねらいが達成できる活動である	4.08	4	0.85	15
	【3-4】時間配分にゆとりがあり適切である	4.12	4	0.91	14
導入	【4-1】今からすることが子ども達によくわかる導入である	4.16	4	0.84	11
	【4-2】やってみたいという気持ちになる導入である	4.19	4	0.83	8
	【4-3】作るものを十分にイメージした上で制作に取り掛かっている (制作活動の場合)	4.15	4	0.87	12

主体的な活動を引き出す	【5-1】 指示が少なく、子どもが自分ですることを決めるようにしている	3.90	4	0.88	31
	【5-2】 すぐに教えるのではなく、子どもが自分で考えるようにしている	3.91	4	0.91	30
	【5-3】 必要な素材や道具を子どもが自分で見つけるようにしている (制作活動の場合)	3.83	4	0.91	34
	【5-4】 作ったものを遊びに使えるような制作物である (制作活動の場合)	3.97	4	0.97	25
活動	【6-1】 子どもが楽しく取り組める活動である	4.35	5	0.79	2
	【6-2】 ねらいが達成できる活動である	4.07	4	0.85	18
	【6-3】 子どもが工夫したり発見したりすることがたくさんある活動である	4.07	4	0.87	18
援助	【7-1】 子どもがつまづいたときに必要な援助をしている	3.96	4	0.91	28
	【7-2】 子どもの活動を発展させるような適切な援助をしている	3.92	4	0.92	29
	【7-3】 言葉で伝えるだけでなく、実際にやって見せている	4.06	4	0.90	21
	【7-4】 うまく活動できていない子どもに適切な援助をしている	3.97	4	0.88	25
	【7-5】 活動に集中できない子どもに適切な言葉かけをしている	3.87	4	0.92	33
	【7-6】 ほかの子ども活動を妨げる子どもに適切な言葉かけをしている	3.90	4	0.90	31
子どもがしたことを認める	【8-1】 たくさんほめている	4.17	4	0.88	10
	【8-2】 具体的にほめている	3.97	4	0.93	25
	【8-3】 それぞれの良いところを見つけて、すべての子どもをほめるようにしている	3.99	4	0.91	23
子どもの姿	【9-1】 楽しそうに取り組んでいる	4.35	5	0.80	2
	【9-2】 集中して、真剣に取り組んでいる	4.33	4	0.76	4
	【9-3】 自分で考えたり工夫したりしている	4.18	4	0.83	9
	【9-4】 ねらいが達成されている	4.08	4	0.85	15
	【9-5】 制作したものをを使って遊んでいる (制作活動の場合)	3.98	4	1.00	24

表4. カテゴリー別の平均値と標準偏差

カテゴリー	平均値	標準偏差	順位
顔の表情	4.26	0.83	1
話し方	4.12	0.88	5
指導計画	4.08	0.86	6
導入	4.17	0.84	3
主体的な活動を引き出す	3.90	0.91	9
活動	4.16	0.85	4
援助	3.95	0.91	8
子どもがしたことを認める	4.04	0.91	7
子どもの姿	4.20	0.84	2

次に、カテゴリー「話し方」についてである。「【2-1】 ゆっくりと丁寧に話している」は平均4.39及び中央値5であり、全35項目中最も高い評価であった。また、「【2-2】 語りかけるように話している」は平均4.32であり、5番目に高い評価であった。しかしながら、「【2-4】 子どもの高さで話している」については平均3.68と最も低い評価となり、同カテゴリー内でも評価に大きな差が出る結果となった。カテゴリー平均は4.12であった。標準偏差は、「【2-1】 ゆっくりと丁寧に話している」は0.72、「【2-2】 語りかけるように話して

いる」は0.78と小さいことから、学生の評価のばらつきが少なく評価しやすい内容であったことがわかる。一方で、「【2-4】子どもの目の高さで話している」は標準偏差が0.94と大きいことから、評価のばらつきが大きく学生にとって評価しにくい項目であることがわかる。同カテゴリ内でも平均値、標準偏差ともに項目内容により大きな差が出る結果となった。これらの結果より、「【2-1】ゆっくりと丁寧に話している」と「【2-2】語りかけるように話している」は、「顔の表情」と同様に、これまでの経験を通して子どもたちが聞き取りやすい話し方や理解しやすい話し方を意識し、身につけることができていると考えられる。しかしながら、目の高さを合わせて話すことは実践できていない学生が多くいることが明らかとなった。今後、保育現場で実際に子どもたちと接する時には、上方から話かけるのではなく、子どもの目線に合わせて話をすることを意識するよう指導する必要がある。

カテゴリ「指導計画」では、全4項目で平均4.04～4.12、順位は14～22番という結果で、特に高い評価も低い評価も示されなかった。カテゴリ平均は4.08であった。中でも、「【3-4】時間配分にゆとりがあり適切である」の項目に関しては、模擬保育の設定時間が15分間と短く、時間配分の調整に難しさを感じたものと思われる。本来、保育所実習や幼稚園教育実習では、設定保育として30分間から45分間程度で行うことが多い。今回は、講義回数や時間の関係上、やむを得ず短い時間設定での模擬保育となった。今後、実際と同じ時間配分での模擬保育を経験することが課題の一つであると言える。その他、「【3-1】ねらいと内容がその年齢に合っている」「【3-2】ねらいと内容が具体的でわかりやすい」「【3-3】ねらいが達成できる活動である」に関しては、全て保育のねらいに関連する項目である。対象学生は、これまでの授業で保育のねらいや内容について学んでいるものの、十分に理解した上で計画を立てられているとは言い難い状況である。同様に、評価者についてもねらいや内容について十分に理解した上で評価することができていない。今後の課題として、ねらいと内容についての学びを深めた上で、保育活動へのつながりを捉える必要がある。

カテゴリ「導入」については、「【4-2】やってみようという気持ちになる導入である」は平均4.19であり、全35項目中8番目と比較的高い評価であった。また、標準偏差は0.83と小さいことから、学生の評価のばらつきが少なく、評価しやすい項目であったことがわかる。カテゴリ平均は4.17と9カテゴリ中3番目に高い。実際の模擬保育では、導入として活動内容に合わせた手遊びをする学生が多く見られた。中にはクイズ形式の導入を行い、自然な流れで活動に入っていく内容もあり、子ども役の学生も興味を持って参加していた。導入に関しては、活動内容と同様に興味を持ち、活動への展開を意識した模擬保育を行っていると言える。

カテゴリ「主体的な活動を引き出す」に関しては、カテゴリ平均3.90、9カテゴリ中9番目と最も低い結果であった。また、項目別にみても、「【5-1】指示が少なく、子どもが自分ですることを決めるようにしている」は平均3.90、35項目中31番目、「【5-2】すぐに教えるのではなく、子どもが自分で考えるようにしている」は平均3.91、35項目中30番目、「【5-3】必要な素材や道具を子どもが自分で見つけるようにしている」は平均3.83、35項目中34番目と、いずれも低い結果であった。「【5-1】指示が少なく、子どもが自分で決めるようにしている」に関する一例を挙げると、模擬保育の中で、保育者役の学生が、「できた金魚を、のりで水槽に貼ってください。」など保育者が子どもへ指示する場面が多く見られた。保育者役の学生は、計画通りに進めなければならない気持ちが高く、子どもの思いに寄り添う余裕がない状況であったことが推察される。しかしながら、どのような言葉かけや環境があると子どもたちが「やってみよう」と思うのかについて、子どもの姿をイメージしながら考えることこそが重要である。子どもの主体的な活動を引き出すことは、乳幼児期の保育・教育における基本的な考え方である。子どもたちは、人やもの、自然などの環境に主体的に関わることを通して、多くの学びを得ている。保育を学ぶ学生は、「子どもの主体性」について理念として理解をしているものの、具体的にはどのような保育を指すのか、保育者としてどのように関わるかが求められるのかを理解できていないと考えられる。今後、「主体的な活動を引き出す」ことについて学ぶことが課題として明らかとなった。他にも、「【5-4】作ったものを遊びに使えるような制作物である」は、平均3.97、35項目中25番目と比較的低い結果であった。また、標準偏差0.97と大きく、評価のばらつきが大きいことがわかる。このばらつきが生じた理由として、活動によって制作するのみで終わるものと制作して遊ぶものに分かれていることが挙げられる。特に、折り紙制作においては作ることそのものが中心的活動

となっている保育が多く見られ、制作したものが次の遊びにつながった活動は少なかった。この場合、ねらいは何かに立ち返る必要がある。つまり、折り紙を作ることによってどのようなねらいを達成するのか、ということである。立案の段階でのねらいの設定は子どもたちの実態に合っているかを確認する必要があると考える。その他に、活動のつながりにも目を向けることも課題である。折り紙を作って終わりではなく、「作ったものを使って遊ぶ」など活動の展開やつながりを意識できるようにしたいものである。

カテゴリ「活動」については、「【6-1】子どもが楽しく取り組める活動である」は平均4.35、中央値は5であり、全35項目中2番目に高い評価が示された。また、標準偏差は0.79と小さく、学生の評価のばらつきが少ないことから評価しやすい項目であることがわかる。模擬保育では、子ども役の学生も実際の子どもの姿を想像したり、なりきったりしながら参加していた。実際、制作活動や運動遊びなど多くの模擬保育において楽しく活動する姿が見られていた。保育者役の学生は、子どもたちが興味を持ちそうな活動を選択、実施することができていたことが評価結果から明らかとなった。

カテゴリ「援助」については、6項目中5項目において全35項目中25番目以下という低い結果であった。カテゴリ平均も3.95と、9カテゴリの中で8番目に低い。中でも、「【7-5】活動に集中できない子どもに適切な言葉かけをしている」は平均3.87であり、全35項目中33番目と低い評価が示された。標準偏差は0.92と高いことから、評価のばらつきが大きく、学生にとって評価しにくい項目であることがわかる。その他にも、「【7-6】他の子どもの活動を妨げる子どもに適切な言葉かけをしている」は平均3.90であり、全35項目中31番目と比較的低い評価が示された。以上の2項目は、現在保育現場において課題となっている「気になる子ども」への対応につながる内容である。一人一人の状況に合わせた関わりが必要となるが、カテゴリ「主体的な活動を引き出す」と同様に、指導計画を作成する際、そして模擬保育においても、具体的な子どもたちの姿をイメージすると同時に保育者としての関わり方について考えておく必要がある。

カテゴリ「子どもがしたことを認める」については、「【8-1】たくさんほめている」は平均4.17であり、全35項目中10番目と比較的高い。一方で、「【8-2】具体的にほめている」は平均3.97であり、全項目中25番目と比較的低い評価であった。後者は標準偏差0.93と大きいことから、学生の評価にばらつきが出たことがわかる。すなわち、保育者役の学生は「よくできたね。」「すごいね。」「じょうずだね。」などほめる言葉を多く掛けていたものの、具体的にどの部分が良いのかについて伝える言葉は少なかったということである。具体的にほめることによって、ほめられた子どもはより活動への意欲が増すと同時に、周囲の子どもたちにとっても「真似してみよう」「わたしはこうしてみよう」など意欲を高めるきっかけとなっていく。子どもがしたことを認める際には、具体的にほめることを意識する必要がある。

最後に、カテゴリ「子どもの姿」である。「【9-1】楽しそうに取り組んでいる」は平均4.35、中央値5であり、全35項目中2番目に高い評価が示された。この結果は、「【6-1】子どもが楽しく取り組める活動である」と同様に高い結果となっており、子ども役の学生たちは活動の楽しさを感じていたことが数字によって示された。加えて、「【9-2】集中して、真剣に取り組んでいる」は平均4.33、全35項目中4番目に高い評価であったことから、活動は楽しく、かつ真剣に取り組むことができる内容であったことがわかる。また、上記の2項目は標準偏差が小さいことから、学生にとって評価しやすい項目である。カテゴリ平均は4.20と全9カテゴリ中2番目に高い評価であった。カテゴリ「活動」の結果同様、模擬保育において、子どもにとって楽しく興味のある活動を行うことができていたことが、結果より明らかとなった。

## まとめ

今回、模擬保育における子ども役からの評価を見る限り、5段階中平均が3を下回る項目は一つもなく、ほとんどの項目において一定の水準を満たしていたという結果であった。

学生による評価が高かった項目として、保育者の笑顔や話し方、楽しく取り組むことができる活動設定が挙げられる。子どもへ対する保育者としての表現方法については、授業及び保育実習を通して身につけてきていることが明らかとなった。また、子どもたちはどのような活動を楽しむのかというイメージができており、多くの模擬保育において雰囲気良く楽しい活動を行うことができていた。

一方で、評価が低かった項目として、子どもの目線の高さで話すこと、子どもの主体的な活動を引き出す

こと、援助やほめることが挙げられる。この結果を踏まえて、乳幼児期の保育・教育の基本的考え方である「子どもの主体性」に関する学びを深め、保育につなげていく必要があることが明らかとなった。また、個別への援助や言葉かけについては、保育を行う際には全体的な活動を見るばかりではなく、ひとりひとりへ目を配り、子どもの様子や考えを読み取ることが重要である。その上で、必要な援助を行ったりほめたりすることで意欲的に活動へ参加できるよう工夫することが求められる。活動を立案する際、子どもたちの姿をイメージすると同時に、保育者としての関わり方についても具体的に考えることに気づけるよう、学生へ伝えていく必要がある。

今後の課題として、学生の評価基準の妥当性が挙げられる。今回は学生による他者評価を行ったが、項目間の平均値の差が比較的小さく、標準偏差も全体として小さい値を示している。これは、模擬保育を行った学生間の個人差や評価項目間の差が小さいというよりも、評価した学生の評価基準があいまいなことから、とりあえず無難な評価を行った可能性を示すものと考えられる。こうした評価を行う際には、事前に評価基準を具体的に説明することの必要性が感じられる。その他、評価項目へ「環境構成」に関するカテゴリーと項目を設定すること、学生一人当たりの模擬保育の時間を多くとって一人一人の特性が出やすいようにすることなど、見直しを図る必要がある。



## 資料1 保育評価表

## 保育評価表

それぞれの項目に関して、「とても良い」を5、「良い」を4、「普通」を3、「あまりよくない」を2、「よくない」を1として評価してください。

※普通(標準的に達成している)の場合を「3」とします。

カテゴリー	評価項目	評価
顔の表情	【1-1】笑顔が多い	
	【1-2】表情が豊か(うれしい・楽しい・驚き・悲しい・心配)	
話し方	【2-1】ゆっくりと丁寧に話している	
	【2-2】語りかけるように話している	
	【2-3】一人一人を見ながら話している	
	【2-4】子どもの目の高さで話している	
	【2-5】わかりやすい言葉で話している	
指導計画	【3-1】ねらいと内容がその年齢に合っている	
	【3-2】ねらいと内容が具体的でわかりやすい	
	【3-3】ねらいが達成できる活動である	
	【3-4】時間配分にゆとりがあり適切である	
導入	【4-1】今からすることが子ども達によくわかる導入である	
	【4-2】やってみたいという気持ちになる導入である	
	【4-3】作るものを十分にイメージした上で制作に取り掛かっている(制作活動の場合)	
主体的な活動を引き出す	【5-1】指示が少なく、子どもが自分ですることを決めるようにしている	
	【5-2】すぐに教えるのではなく、子どもが自分で考えるようにしている	
	【5-3】必要な素材や道具を子どもが自分で見つけるようにしている(制作活動の場合)	
	【5-4】作ったものを遊びに使えるような制作物である(制作活動の場合)	
活動	【6-1】子どもが楽しく取り組める活動である	
	【6-2】ねらいが達成できる活動である	
	【6-3】子どもが工夫したり発見したりすることがたくさんある活動である	
援助	【7-1】子どもがつまづいたときに必要な援助をしている	
	【7-2】子どもの活動を発展させるような適切な援助をしている	
	【7-3】言葉で伝えるだけでなく、実際にやって見せている	
	【7-4】うまく活動できていない子どもに適切な援助をしている	
	【7-5】活動に集中できない子どもに適切な言葉かけをしている	
	【7-6】ほかの子ども活動を妨げる子どもに適切な言葉かけをしている	
子どもがしたことを認める	【8-1】たくさんほめている	
	【8-2】具体的にほめている	
	【8-3】それぞれの良いところを見つけて、すべての子どもをほめるようにしている	
子どもの姿	【9-1】楽しそうに取り組んでいる	
	【9-2】集中して、真剣に取り組んでいる	
	【9-3】自分で考えたり工夫したりしている	
	【9-4】ねらいが達成されている	
	【9-5】制作したものをを使って遊んでいる(制作活動の場合)	

## 引用文献

- 1) 文部科学省 (2021) 「教育課程コアカリキュラム」 p.3  
([https://www.mext.go.jp/content/20210730-mxt\\_kyoikujinzai02-000016931\\_5.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210730-mxt_kyoikujinzai02-000016931_5.pdf))
- 2) 坂本真由美 (2015) 「模擬保育を通じた自己省察の試み」 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要 第47号p.116
- 3) 猪田裕子・久保木亮子・塩津恵理子 (2018) 「保育者養成における模擬保育の意義に関する一考察 (1)」 教職課程・実習支援センター研究年報 (1) p.26

## 参考文献

- 坂本真由美 (2015) 「模擬保育を通じた自己省察の試み」 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要 第47号pp.111-116
- 坂本真由美・田中るみこ (2015) 「自己省察が学生の保育実践の意識向上に与える影響に関する一考察—模擬保育における他者評価と映像の自己省察から—」 中村学園大学発達支援センター研究紀要 第7号pp.19-24
- 栗山誠 (2019) 「保育の実践力につながる『表現』授業のあり方に関する一考察：造形表現の模擬保育を通じた学生の学び」 教育学論究 11号pp.37-46
- 上月智晴 (2019) 「保育内容総論における模擬保育と学生の学び」 京都女子大学教職支援センター研究紀要 第1号 pp.15-27
- 池田充裕 (2013) 「模擬保育による学生の教授力・評価力の向上に関する取り組みと課題-ビデオ撮影による自己評価とピア評価・教員評価の効果の検証-」 山梨県立大学人間福祉学部紀要 Vol.8 pp.61-72
- 畑啓子・池上貴美子・上田智佳・種子田順子(2017) 「初心者学生の模擬保育見学による意識変容に関する横断的調査」 甲子園短期大学紀要 35 pp.47-52
- 猪田裕子・久保木亮子・塩津恵理子 (2018) 「保育者養成における模擬保育の意義に関する一考察 (1)」 教職課程・実習支援センター研究年報 (1) pp.17-27
- 杉村智子・安東綾子 (2018) 「保育内容の指導法における模擬保育実践-能動的な共同による学びの視点から-」 帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター紀要 第3号 pp.77-87
- 猪田裕子・久保木亮子・塩津恵理子 (2019) 「保育者養成における模擬保育の意義に関する一考察 (2)」 教職課程・実習支援センター研究年報 (2) pp.3-13

## **Simulated Childcare Practice in the Childcare Contents (Expression) – From the Perspective of Comprehensive Evaluation–**

Masae SADAKATA

Department of Childfood Care and Education, Kyushu Women's Junior College  
1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

### **Abstract**

The purpose of this research is to clarify areas that junior college students are good at and areas that require future guidance from a comprehensive perspective of childcare through evaluation of simulated childcare in the childcare contents (expression). The evaluation items were 9 categories and 36 items, including items such as facial expressions toward children and the way they spoke, items related to the contents of the instruction plan (daily plan), and items related to specific assistance and words, evaluated by junior college students who observed the simulated childcare. was analyzed. As a result, childcare workers were highly evaluated for their smiling faces, speaking style, and setting up activities that allow children to engage in fun activities, they were highly evaluated for speaking at the child's level of perspective, drawing out children's independent activities, and providing support and praise. It became clear that there were areas where junior college students were good at and areas where further guidance was needed in the future. Based on these results, junior college students will have to deepen their study of the content related to 'encouraging children's independent activities,' which is the basic concept of childcare and education in early childhood, and they will use images of children when creating instruction plans. At the same time, I pointed out the need to provide guidance on how to be involved as a childcare worker.

**Key words :** Childcare contents (expression), Simulated childcare,  
Retrospective perspective, Children's independence